

## 第52回 日本小児臨床薬理学会学術集会



大会長 瀧谷 公隆  
(医学教育センター 専門教授/小児科学教室)

2025年(令和7年)11月15日(土)・16日(日)に大阪中央公会堂にて、第52回日本小児臨床薬理学会学術集会を開催いたしました。本学会が本学会を開催するのは、第22回(1995年・美濃真大会長)および第36回(2003年・玉井浩大会長)を経て、3回目です。

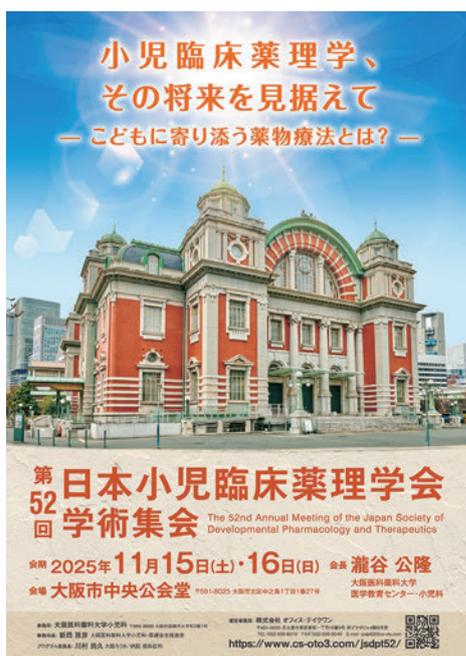
本学会は小児科診療に携わる医師、薬剤師、製薬企業の研究者などの多職種により構成され、薬物治療学、臨床薬理学、臨床薬学、薬剤疫学、レギュラトリーサイエンス等の観点から、小児科領域の医薬品に関する医学・薬学的な検討、医薬品評価・開発推進、適応外使用問題・未承認薬問題解決および医学・薬学教育などに取り組んでいます。子どもへの薬物療法では、子どもとご家族本位の治療であるべきであり、我々は切磋琢磨して臨床および研究を継続する必要があります。そこで、今回のテーマは、「小児臨床薬理学、その将来を見据えて—こどもに寄り

添う薬物療法とは?—」としました。

プログラムの構成として、大会長講演1題、特別講演1題、教育講演9題、セミナー2題、プレナリーセッション6題、一般口演13題、ポスター17題、シンポジウム5題としました。今回の参加登録人数は1,051人でした。

最初の大会長講演では、私が「小児臨床薬理から多職種連携教育へ」を講演しました。

特別講演では、塩野義製薬株式会社の手代木功代表取締役会長兼社長CEOに「SHIONOGIの小児領域における取り組み」を講演していただきました。小児薬物療法を考える上では、製薬の立場の意見が非常に重要であります。企業からの小児用製剤に対する努力を拝聴することができました。教育講演では、1)大石公彦教授(東京慈恵会医科大学小児科)：「国境を越えた治療薬の違い—先天代謝異常症の診療経験から考える」、2)岸勘太先生(大阪医科薬科大学小児科)：「小児の肺循環障害に対する薬物療法」、3)川村尚久先生(大阪ろうさい病院 感染症科・小児科)：「パンデミックと抗ウイルス薬」、4)河田興教授(摂南大学薬学部臨床薬理学研究室)：「初めての論文作成ガイド」、5)梶恵美里先生(大阪医科薬科大学小児科)：「高槻市での中学生H. pylori菌検診の実際」、6)新田雅彦特務教授(大阪医科薬科大学病院 医療安全推進室)：「子どもの安全を守るチーム医療における医薬品安全管理の課題」、7)日馬由貴先生(大阪大学医学部附属病院 感染制御部/感染症内科)「小児における薬剤耐性問題と抗菌薬適正使用」、8)渡邊智美様(NPO法人トーチの会 先天性トキソプラズマ&サイトメガロウイルス感染症患者会)：「当事者から見た母子感染症と医療者へ向けたメッセージ」、9)忽那賢志教授(大阪大学大



学会ポスター

学院医学系研究科 感染制御学)：「SNSを通じた感染症の情報発信」を講演していただきました。いずれも日常業務には重要な情報であり、参加者の明日からの診療に役立つかと思えます。

シンポジウムでは、5テーマを企画しました。本学会のテーマは、臨床に重きを置いていることが特徴です。1)「母乳と薬のジレンマを超えて：最新の知見と実践のヒント」、座長：和田友香先生(国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター新生児科)・伊藤真也教授(トロント小児病院)、2)「多職種連携から俯瞰した薬学教育」、座長：河田興教授(摂南大学薬学部)、3)「若手医療者のための将来を見据える臨床薬理」、座長：田野島玲大先生(横浜市立大学大学院 データサイエンス研究科)・齊藤順平先生(国立成育医療研究センター 薬剤部)、4)「ワクチンを正しく理解する」、座長：田中敏博先生(静岡厚生病院 小児科)・川村尚久先生(大阪ろうさい病院 感染症科・小児科)、5)「在宅医療と臨床薬理」、座長：日下隆教授(香川大学小児科)です。いずれも質疑応答の時間を超えるぐらいの白熱したシンポジウムでした。

セミナーでは、保科隆之先生(福岡市立こども病院 総合診療科)：「小児のインフルエンザ診療に関する最新の知見」および野貴司教授(川崎医科大学小児科)：「インフルエンザワクチン～各種モダリティと期待される効果、注意すべき副反応」の2演題を企画しました。11月はインフルエンザシーズンに入る時期であり、非常にタイムリーな演題でありました。また、大西記念小児臨床薬理学会賞受賞記念講演では、昨年度の本学会賞受賞者である鈴木柚衣南先生(順天堂大学医学部附属順天堂医院)が「医薬品中に含まれるアスパルテームがフェニルケトン尿症患者に及ぼす影響(第2報)ジェネリック医薬品および同種・同効薬の比較」をご講演されました。

本学会では、4団体の患者会の展示を設定しました。「NPO法人トーチの会：先天性トキソプラズマ&サイトメガロウイルス感染症患者会」、「風疹をなくそうの会『hand in hand』」、「VPDを

知って、子どもを守ろう KNOW★VPD！」および「日本アラジール症候群の会」です。各ブースでは、参加者は非常に熱心に患者会のお話に耳を傾けていました。

大阪中央公会堂は、薬問屋である道修町の近くに立地しています。そこで本学会では、薬剤に関係する参加者が多いので、目玉のエクスカッションとして「薬のまち道修町ツアー」を企画しました。お陰様で両日ともに定員(20名)が早々に締め切りとなる大反響となりました。コースとしては、～適塾～緒方ビル・除痘館跡～大阪薬科大学発祥の地・塩野義製薬本社展示コーナー～田辺三菱製薬史料館～住友ファーマ展示 Gallery ～杏雨書屋～少彦名神社(神農さん)・くすりの道修町資料館～旧小西家住宅史料館となります。両日ともに秋晴れで、ツアー参加者は非常に楽しめたと思います。本学は2021(令和3)年に大阪医科大学と大阪薬科大学が合併しました。このツアーで大阪薬科大学発祥の地をご紹介できたのも何かの縁かと思えます。さらに両日の最後には、ヴィオラとピアノの演奏で、参加者の皆様をお送りしました。素晴らしい舞台のある会場で、楽曲を聞かれることで、皆様にも楽しんでいただけたかと思えます。

最後に本学会の運営にご協力いただいた大阪医科薬科大学小児科学教室医局員および関連病院の諸先生に感謝いたします。また、多大なご助力をいただきました大阪医科薬科大学医師会の皆様はこの場を借りまして、深く御礼申し上げます。



集合写真

## 第21回 日本脳神経外科光線力学学会



会 長 鰐 淵 昌 彦 (脳神経外科学教室 教授)

2025(令和7)年11月22日(土)～24日(月・祝)の3日間、東京慈恵会医科大学の大学1号館にて第21回日本脳神経外科光線力学学会を主催いたしました(図1)。

近年、光学系の技術革新と新規蛍光色素(光感受性薬剤)の開発によってphotodynamic diagnosis(PDD)、photodynamic therapy(PDT)、photoimmunotherapy(PIT)が医療の広い分野において注目を集めています。日本脳神経外科光線力学学会(Japan Photodynamic Neurosurgical Society: 略称JPNS)は、脳神経外科領域における光線力学の研究、診断および治療への応用を促進し、その発展を通して公

共の福祉に貢献することを目的に設立された学会です。日本は脳腫瘍に対する光線力学治療(PDT)の分野において世界のトップランナーであり、タラポルフィン・ソディウム(レザフィリン®: Meiji Seikaファルマ)を用いた術中PDTの有用性を医師主導の多施設臨床試験で示し、本学会が核となって2004(平成16)年に世界で初めて悪性神経膠腫に対する臨床PDTを保険診療として確立しました。その後も、浸潤性の脳腫瘍である膠芽腫の局所制御率の改善や無増悪生存期間の延長といった臨床エビデンスを、継続的に世界へ発信しています。

21回目となる今回は、第46回日本レーザー医学会総会(JSLSM)の坂本優会長(公益財団法人佐々木研究所附属杏雲堂病院婦人科/東京慈恵会医科大学産婦人科学講座客員教授)、第35回日本光線力学学会学術講演会(JPA)の矢野友規会長(国立がん研究センター東病院消化管内視鏡科科長)と共に“LASER WEEK in TOKYO 2025”として3学会合同で開催いたしました(写真1)。JPNSへも72の演題をいただき、3学会合同開催の強みを生かした診療科横断的な「合同シンポジウム」を多数企画し、各領域のエキ



図1: 学会ポスター



写真1: 左から矢野友規JPA会長、坂本 優JSLSM会長、筆者(JPNS)

スパートの先生方にご登壇いただきました。おかげさまで、日本の光線力学医療の現状と将来展望について、建設的かつ有意義な議論の場を提供できたと考えております。

さて私どもの教室は初代主任教授の故太田富雄先生の時代から、脳外科疾患の診断や治療に光線力学反応を応用する研究を続けてまいりました。フルオレセインを脳腫瘍の同定に用いる術中診断薬として、蛍光ガイド下に悪性神経膠腫を摘出する手術を1994(平成6)年に世界で初めて実施したのは当教室です(写真2)。またインドシアニングリーン(ICG)を用いて脳微細血管の血流を術中に可視化できる手術顕微鏡は、先代の黒岩敏彦名誉教授ならびに梶本宜永功労教授を中心として、1998(平成10)年に世界に先駆けて開発されました(写真3)。その後、この術中ICG蛍光診断技術は脳神経外科手術の安全性向上に寄与することが広く認知され、現在ではZeiss社やLeica社製の市販手術顕微鏡にもその機能が搭載されています。

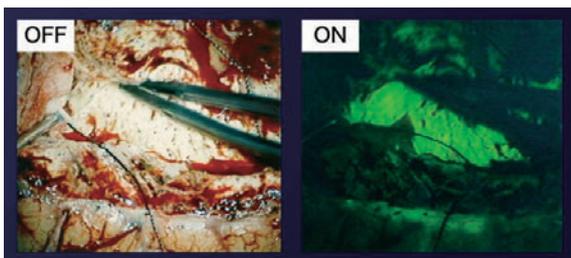


写真2：当院において世界で初めて行われた蛍光ガイド下の脳腫瘍摘出手術(1994年)

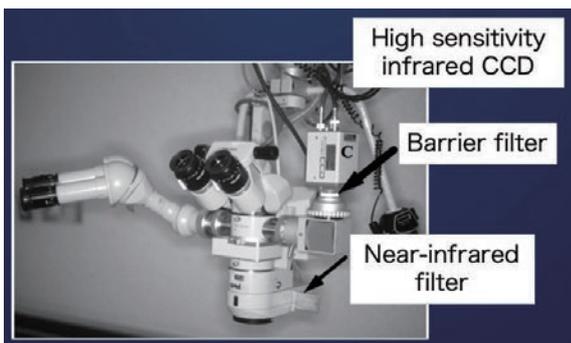


写真3：ICGによる術中血管撮影を実用化した手術顕微鏡 (Kuroiwa T, Kajimoto Y, Ohta T. Minim Invas Neurosurg. 2001)

私の着任後は「脳内留置型薄膜LED光源」の開発研究を、青色LEDの発明でノーベル物理学賞を受賞された中村修二教授(カルフォルニア大学サンタバーバラ校)と共同で開始しています。本研究は術中PDTのみならず、術後に持続的なPDT(metronomic PDT)を行うための体内留置用光源の実用化を目指すものです。本学会では、中村教授の研究室へ留学した当科の井畑知大先生が、シンポジストとしてその進捗を発表しました(写真4)。



写真4：井畑知大先生

主催校講演では、前半に私が当教室のPDD/PDT研究について紹介し、後半では本学会の事務局長を務めた野々口直助先生が、ポルフィリン前駆体であるアミノレブリン酸(アラベル®：SBIファーマ)を用いた蛍光ガイド下脳腫瘍摘出術における偽陽性(取り過ぎ)や偽陰性(取り残し)を回避する実践的な方法について、当科の950を超える臨床手術検体の解析研究に基づくエビデンスを交えながら詳細に解説しました(写真5)。



写真5：左から山田浩徳先生、筆者、野々口直助先生

「JPNS 特別講演」では米国電気電子学会(IEEE)のシニアメンバーであり、Green Planets株式会社CEOの奥野敦史先生より、高輝度LEDを用いた植物栽培の効



写真6：奥野敦史先生

率化、院内感染症対策・せん妄予防への応用、さらには可視光に近い短波長光を利用した次世代通信システムの可能性など、世界的に活躍される奥野先生ならではの多岐にわたる大変興味深いお話を拝聴できました(写真6)。

また「JPNS教育セミナー」では、理化学研究所脳神経科学研究センター副所長の吉原良浩先生に、「未踏の脳領域『前障(Claustrum)』の機能解明に向けて」と題しご講演いただきました(写真7)。



写真7：  
吉原良浩先生

医学部で“claustrum”の名称を学ぶ機会はあるても、その機能については教わることはほとんどありません。この島回の内側に位置する薄いシート状の神経核は、全ての新皮質領域と双方向性の神経結合を有しているにもかかわらず、長年その役割は謎に包まれていました。吉原先生らのグループは、前障ニューロン特異的にDNA組み替え酵素Creを発現するトランスジェニックマウスの樹立に成功し、このマウス系統を用いて前障ニューロン選択的な入出力の可視化や電気活動イメージングを実現され、前障の機能解明を進めておられます(Narikiyo K, et al. The claustrum coordinates cortical slow-wave activity. Nat Neurosci. 2020)。脳の手術を専門

にしている我々脳神経外科医ですら理解が乏しい「前障」について、睡眠・安息時に観察される大脳皮質徐波活動の制御に関わる可能性を緻密な基礎研究データを用いて分かりやすくご説明いただき、一同大きな感銘を受けました。

ご多忙の中、貴重な御講演を賜りました奥野敦史先生、吉原良浩先生に改めて深く感謝申し上げます。

3学会合同開催となった今回は、創薬・レーザー医学・AI医療応用といった関連分野で活躍されている薬学・生物学・理工学等の研究者から、頭頸部外科・泌尿器科・婦人科・呼吸器科・消化器科・耳鼻咽喉科・皮膚科・形成外科・脳神経外科等の臨床医、製薬企業で研究開発に携わる皆様まで、3日間で620名余の方々にご参加いただきました。どのセッションにおいても素晴らしいご発表と活発な議論が展開され、おかげさまで盛会裡に全日程を終えることができました(写真8)。

最後になりましたが、本学会の開催にあたり多大なる御厚情と御支援を賜りました大阪医科薬科大学医師会の皆様に、心より御礼を申し上げます。



写真8：会員懇親会の様子と集合写真